

平成 21年4月30日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2007 年度～2008 年度  
 課題番号：19700492  
 研究課題名 (和文) コミュニティダンスにおける共創プロセスについての研究

研究課題名 (英文) The process of co-creation in community dance

## 研究代表者

林 麗子 (HAYASHI REIKO)  
 名古屋学芸大学・ヒューマンケア学部・助手  
 研究者番号：10410896

## 研究成果の概要：

概して「コミュニティダンス」といわれる活動は、現在の多様な「コミュニティ」に属する私たちに、実際の活動において人と人とのネットワーク化を促すだけでなく、身体が感応しあうという間身体的レベルの体験を享受させることで、新しい「つながり」を生成している。本研究では、本研究・活動に関わる全ての人に、「共生」を捉えなおし、新しい関係性を創出する契機をつくるべく、「障害者」と「健常者」によるコミュニティダンスのワークショップの実践と省察を試みた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,000,000	0	2,000,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,200,000	360,000	3,560,000

## 研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：コミュニティ、身体、コミュニケーション

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 現代における「コミュニティ」

人間関係の希薄化が問題視される現在、地域社会は、コミュニティとしての機能を失ってきている。一方、現在の高度情報社会という観点から捉えると、迅速な交通・通信手段は新しいネットワークの成立を可能にし、物理的に距離のあった他者との新しいつながりが形成されてきている。さらにはネット上だけでの「コミュニティ」など、既成の概念では捉えられない「コミュニティ」が生成さ

れ、コミュニティ自体の概念が広がってきているのが現在の状況であろう。

## (2) コミュニティダンスの発展

このような背景の中で「コミュニティアート」は、その在りようを変化させ、発展させている。これは、イギリスにおいて60年代後半に発祥し、様々なアーティストやコミュニティワーカーによって、アートを一般市民に開くこと、コミュニティの再構築を目的に、文化政策として時代の要請に応じた変遷を経て発展した一つのムーブメントである。今

日では、各芸術団体、地域におけるアートセンター、または地域の行政などを中心に、様々なコミュニティアート教育プログラムも実施されている。表現様式は多様であり、絵画や造形、ダンスや演劇、あるいはこれらの統合した形で実践されている。

国内においては、アーティストだけではなく、教育者や福祉関係者、地域住民などが協働して様々な試みを重ね始めている。

### (3) 当事者として、関わる研究

本研究では、実際に「障害者」と「健常者」によるコミュニティダンスのワークショップ（以下WS）、を実践し、その共創プロセスを分析することで、両者の関係性を探り、身体表現活動がコミュニティ生成に貢献しうる可能性や、その場を創るファシリテータのあり方について論じたい。

本研究は、単に第三者的立場からの研究ではなく、研究者自身が実践を行い、そこでの省察を踏まえながら、研究者自身の枠組みや概念を見つめ直し、新たに実践を試みるアクションリサーチである。

## 2. 研究の目的

### (1) 現状調査

日英におけるコミュニティダンスの実践例を視察、インタビュー調査し、文化社会的背景をおさえた上で、その社会的役割や問題点について統括する。

### (2) WSの実践と省察

WSを実践し、省察および動きの分析をすることで、ワークショップファシリテーターに必要な身体性や専門的技術について言及する。

## 3. 研究の方法

### (1) 現状調査

#### ①英国における主な視察対象団体と活動

- ・ Community Dance Wales および Rhondda Cynon Taff Community Arts 主催コミュニティダンスアーティストトレーニングコース「Professional Summer School of Dance2007」
- ・ Laban centre および Greenwich Dance Agency

#### ②日本における主な視察対象団体と活動

- ・ ミューズ・カンパニー企画 Wolfgang Stange 氏のワークショップ「Dance Dynamics」
- ・ クリエイティブ・アート実行委員会主催（ミューズ・カンパニー企画制作）「コミュニティ・ダンス・インターンシップ・プログラム」
- ・ NPO 法人 Dance Box、ブリティッシュカウンシル企画主催 シンポジウム「Dance life festival 2008」

### (2) WSの実践と省察

## ①実践

目的設定、内容計画については、ワークショップファシリテータ（研究者）が主として行うが、適宜、関係者（WS制作担当者、WS参加者、ミューズカンパニートレーニングコース関係者、コミュニティダンス実践家）に意見を求め、内容の洗練に努めた。企画運営については、制作担当者（本研究労務者）の協力を得た。

## ②省察

各WS後に参加者（希望者のみ）と振り返りを行ない、次回のワーク内容や課題について話合った。また、動きの分析法である Laban Movement Analysis を用い、動作分析資格者（CMA）のから、主にファシリテータの動きの提示による枠組みの与え方についてフィードバックを得て、省察の参考とした。

## 4. 研究成果

### (1) 英国におけるコミュニティダンスの現状報告

英国では、「Arm's Length」という方針により、各芸術団体は行政（文化・メディア・スポーツ省）から直接的な資金援助を受けず、Arts Council（芸術評議会）という公的機関を通して間接的に援助を受けることで、政治的中立と表現の自由を維持しようという施策がとられている。

コミュニティダンスファシリテータと呼ばれる実践家達はこのような文化政策の中で保護されながら活動しており、各々の背景、専門性や信念を、特性として生かしたワークショップを各地で展開しているため、その形態、目的は多様である。

そこで、非営利のダンス支援組織である Foundation for Community Dance は、コミュニティダンス専門家のための枠組みづくりを目指し、2005年より実践家達へのコンサルテーションを始めこれらを元に、コミュニティダンスの定義、核心的価値、運営の信条について、まとめている。いかに実践家達の創造的自由度を保った上で枠組みをつくるか、ということが大きな懸案事項となっている。

参加した専門家のためのトレーニングコース（前掲）でも、確固たるコミュニティダンスの手法が教えられることは決してなく、個々に信条を持った講師たちが、各自の取り組みを紹介し合うことで、受講生（実践家）たちが、新しいインスピレーションを得て、各々の活動へフィードバックすることが強調されていた。そして、個々が実践している上で具体的に何が問題なのか、ということをコンサルティングしたり、ピアスーパーバイズしたりすることで、自らの活動を自ら振り返り、活気づける機会としていた。

現在、いくつかの大学でコミュニティダン

スのコースが設けられているが、実際にコミュニティで活動するためには、必要な資格や学歴は特に指定されておらず、むしろ、アーティスト、ダンサー、振付家としての実績などが問われる場合が多いという。

## (2) 日本におけるコミュニティダンスの現状報告

国内において首都圏および京都を中心とした現状調査を行った。その中でも、日本で1990年からコミュニティアート活動の企画制作を試みてきたミュージズ・カンパニーという団体に着目し、「コミュニティ・ダンス・インターンシップ・プログラム」(前掲)に参加し、調査を行った。

ミュージズカンパニー代表の伊地知によると、クリエイティブ・アート実行委員会(ミュージズ・カンパニー企画制作)では1994年より指導者養成コース(コース名は、「ワークショップ・リーダー・トレーニング・プログラム」「コミュニティ・ダンス&ミュージック・トレーニング・プログラム」など単一ではない)を開設しており、「これまで修了生は約150名おり、実際に活動をしている人は他の仕事をしながら、あるいは結婚している活動を継続している人がほとんどである。人数は正確には把握できていないが、音楽、ダンス合わせて30人~50人程度の修了生が実践家として活躍している」という。「英国と異なり、日本に於けるコミュニティアートの実践家たちは、専門家としての地位が確約されず、公的な文化活動への助成金や企業からの協賛金が少ないため、殆どはボランティアで活動するか、わずかな謝礼を受け取るのみで生計が成り立たない現状にあるという(伊地知)」。

このような状況下にあるが、当該コース修了生たちのメーリングリストが最近発ち上がり、今後各自が活動を起こしていく、あるいは継続していく上で、情報提供やピアスーパーバイズなどを行い、互いにサポート体制を整えようとしているところである。

また、NPO法人Dance Box主催シンポジウム「Dance life festival」では、各地のコミュニティダンス実践家、アーティスト、教育関係者、企画制作者、企業助成金担当者などが集い、「コミュニティダンス」の現状と問題点を話し合い、ネットワークづくりが進められた。日本においては、「コミュニティダンス」に類する概念やその認識は明確に浸透せず、また実践家達も各々に点在しながら活動している状況のようであるが、「コミュニティダンス」的な活動は継続的に生まれ、それがあつたコミュニティには着実に根付いてきているといえる。この現状は、英国におけるコミュニティダンスの萌芽期との類似を示唆するが、今後の発展については、各国の歴史的、文化的背景や国の文化政策と絡み合

いながら、独自の方向へと進むように推察される。

## (3) コミュニティダンスWSの実践報告

### ①概要

日時：2009年3月14、15、21、22、28日の5日間(いずれも土日)、13時~15時(最終日のみ11時~15時)

対象者：19名(19歳~65歳の有志；男性7名；女性12名)「障害」のある方(知的障害、ダウン症)、ない方、ダンサー、ダンス初心者

ねらい：障害のある人とない人とが、多様な感受性、身体性、表現性を活かし合い、共に創作活動を行う。

内容：WS各回のテーマと内容を、Table1に示す。各回の開始前に、参加者は、様々な抽象形をしたシールから気に入ったもの一つを選び、呼ばれたい名前を描いて名札として用いた。各回最初には、互いの名前を呼び合うワークを取り入れた。また、ワーク後には円となり、希望者には感想を述べてもらい、皆でシェアリングを行った。

Table 1 WS各回のテーマと内容

第1回 (3月14日)	テーマ	緊張をほぐす、感じる体験、動きの体験
	内容	動きをみつける 質感を変えて動く ペアワーク(動かす/動かされる)
第2回 (3月15日)	テーマ	繊細な感覚を味わう
	内容	金糸とあそぶ ペアと糸と動く グループ創作(糸を用いた人間オブジェ、テーマから動きの創作)
第3回 (3月21日)	テーマ	自由な発声・創音・ダンス
	内容	音・声とあそぶ ペアワーク(感触・質感を動く) グループ創作(ペアの動きを発展)
第4回 (3月22日)	テーマ	いまここで生まれるダンス
	内容	願いをダンスに 即興の小作品
第5回 (3月28日)	テーマ	観客と分かち合う
	内容	リハーサル 各回のワークを用いて作品発表(約1時間)

### ②背景理論

ワークショップの目的、内容を考案するにあたり、まずは、研究者自身の研究スタンス

や理論の位置づけを明らかにする必要がある。一つは、障害学にある「障害の社会モデル」である。また、ダンスの理論には、ラバンによる動きの視点がベースにある。ワークショップの手法は、ダンス/ムーブメントセラピー、表現アートセラピー、オーセンティックムーブメント、ボディワーク、ヨガ、整体法に加えて、作品創作という観点では、インスピレーションに依拠するところが大きい。

③共創プロセス(1) — 実施にいたる経緯 —  
企画から、実践、省察にいたるまで、多様な人との関係性が生まれ、発展した。

本WSの参加者の半数は、他のシンポジウムやワークショップ、研修会等を通して知り合い、個々の問題意識について話し合い、個々の行動化を促進し合いながら、共にできる活動の可能性について探り合った人々である。3名は筆者が所属する大学の学生であり(幼児保育専攻)、掲示募集を見て、自主的に参加した。障害のある方々は、同じく参加者である養護学校の教員が自身のダンスサークルの中でアナウンスし、参加を募った結果、自主的に参加してくれた人たちである。

本WSは筆者が中心となり、声かけを行い、WSの実施へと向かったが、その裏には、「当該研究費によるワークショップを研究期間内に行う」必要性という異なる次元の問題が絡んでいたことが、WSの実質的な意義を考えるとときに、無視できない要因となっている。このような外的な要因が、集まった参加者たちを無理なタイミングで、無理な方向へ誘導していなかったか、ということは、筆者自身で問い直すべきことであると思われる。

④共創プロセス(2) — 「気づかざる前提」に気づく —

本研究自体が、かかわる全ての人に対して、「何らかの」影響を与えながら、創られていき、研究目的や意義が常に問い直され続けた。

特に「なぜ、「障害」のある人とならない人のワークショップを行いたいのか？」という問いかけは自他から頻りに投げかけられた。一つの答えとしては、筆者自身が「障害」のある人の表現に心揺さぶられた経験にある。ともすれば意識的に「表現」してしまいがちな「健常者」にとって、「障害」のある彼らの、感受しながら表現している、その素直な身体性は、新鮮な刺激となり得るのではないか、という期待が初めからあった。しかしながら、ここに筆者自身の他者に対する安易なステレオタイプ化が行われていることに気づくのである。彼らの深い感受性は、「彼ら」と一括りにできることではなく、やはり個々に特性がある。「障害」のある方へシンパシーを感じやすい筆者は、「障害者」と「健常者」による創作活動を促進するにあたって、果たして、ふさわしい役割を果たしていたの

だろうか。

そして、この気づきは「そもそも、この、『障害のある人とならない人で・・・』という意識自体がある種の『障壁』を生んでいるのではないか」という次のモードの問いを生むことになった。実際に、ファシリテータが創作中に何らかの選択や判断をなす場合には、

「障害」があるか否か、という基準よりも、感情情緒や、美意識のような個人的感覚が基準となつて、即興的に行動化が起こり、その場が促進させられていたといえる。「障害」への拘りが「障害」を生むこともあろう。

⑤共創プロセス(3) — 異なる感受性に出会ったエピソード —

WS第2回において「繊細な感覚を味わう」をテーマに細い金糸を用いたワークを行った。この金糸は、筆者が、Lygia Papeによるインスタレーション作品《Teteia 1. c》

(2008, 東京都現代美術館) から呼び起こされた繊細な身体感覚に着想を得ていた。

WSの内容は Table1 のとおりであるが、グループ創作を行っている途中、ある一人の参加者が床に伏して、動けなくなるという場面があった。彼のグループでは、また別の参加者から出された「華やかに、かわいく、美しく」というテーマで動きを創作しており、動けずにいる彼に対して、初めは「一緒にやろう」と働きかけていたが、彼は床に這いつくばった状態のまま共に踊ろうとはしなかった。その後、グループ毎に創作発表を行ったが、彼はグループには入らなかった。WS最後のシェアリングのとき、輪によやく入った彼から言葉が出てくるのを皆がじっと見守った。なぜ、彼は動けなくなったのか、今彼は何を感じているのか、筆者はそれらを知りたかった。となりに座っていた参加者が、彼の言葉を一つ一つ丁寧に聴き、代弁してくれた。「悲しくなって、動けなくなった」ということであった。動けなくなった彼は、この日のテーマであった金糸の繊細さ、この日用いた音楽の波長に、敏感なほどに感受し、どうしていいかわからない程に悲しくなり、動けなくなったということであった。

彼はダウン症の「障害」を持っている。彼の感じすぎてしまう感受性は社会の中でときに、生きにくく「障害」となることもある。しかしながら、物事にそこまで感じ入ることのできる身体性に、他の多くの参加者は、共に表現する者として深く感銘を受けた。そして、このような場でこそ、ファシリテータの役割が問われるのではないか。個人の「感じやすさ」が結果として当人を傷つけてしまうのではなく、それが表現への契機となつて、気持ちを発散、昇華させ、他者と共有できるような場を創るために十分な配慮と工夫が臨機応変に施さなければならないと考える。

#### (4) 今後の展望

本研究では、筆者自身が当事者意識を持ってコミュニティダンスに関わることで、今まさに生まれている現象に迫ることを試みた。活動の立ち上げに始まり、少なくとも、筆者本人は、コミュニティダンスなるものを内から調査し、考察する機会を得たが、これまでの多くの先駆者たちの試みやこれからの展望に対して、有意義な研究結果を提供できたとはいえない。結局、アクションリサーチとして筆者が貢献し得ることとは、コミュニティがより良くなることを絶えず問い直しながら実践を続けることであろう。

今回実施したWSは一つの契機にすぎなく、これを元に、「今何が必要であるか」ということを真に問いながら、省察をふまえた上で、実践的試みを続けたい。ここで、明記しておくべきことは、「活動を起ちあげること」がその最たる目的ではないということである。筆者は、ダンスが社会に貢献できる可能性を信じる者の一人であるが、同時に一研究者として、自身の実践を振り返ること、常にその意義を問い直し続けることを忘れてはならないと自戒している。結果として、狭義の意味での「実践」を辞めることが、そのとき最も適切な「実践」であることも可能性としてあろう。自身の存在意義まで揺らぐような体験が時にはあろうことも覚悟して、今後も試みを続けたい。

また、同じように実践を続けている人たちの経験が、研究という手段をとおして集合的な実践知として推敲されれば、より質の高いコミュニティダンスが生まれ、結果としてコミュニティダンスが社会的に認知されることにもつながるだろう。そのために、実践家たちには、研究対象として自らの実践を提供していただき、既に個々に積み重ねられた実践知を第三者へと伝えてほしい。実践家が研究者と連携をとりながら常に実践を振り返りながら、新しい実践を創っていくという試みが生まれても良いのではないか。あるいは、自ら実践と研究に携わりながらコミュニティダンスの発展に貢献する実践研究者が出てくることを願う。さらに、このコミュニティダンスという現在進行形のムーブメントは、社会学的あるいは障害学的な観点から見ても、興味深いものであると思われる。今後、異なる領域の研究者がこのテーマについて多角的な視点から示唆を加え、さらに問題が掘り下げられることを望んでいる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 1件)

Yukari SAKIYAMA, Kumi NARUSE and Reiko HAYASHI, Dance/Movement Therapy for

Children in Japan, American Dance Therapy Association the 42nd Annual Conference  
The Thirteenth International Panel Dance Therapy with Children throughout the World, 2007年9月29日 Brooklyn Bridge, New York

〔図書〕(計 1件)

平井タカネ (監修) 創元社、医療現場に活かすダンス・ムーブメントセラピーの実際、2008

〔その他〕

・身体表現ワークショップ「うらら、まふ」  
2009年3月14、15、21、22、名古屋学芸大学および東郷町イーストプラザいこまい館にて

・公開ワークショップ(ワークショップ参加者によるパフォーマンス発表)

「うらら、まふ」

2009年3月28日、名古屋学芸大学にて

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

林 麗子 (HAYASHI REIKO)

名古屋学芸大学・ヒューマンケア学部・助教  
研究者番号：10410896

##### (2) 研究分担者

##### (3) 連携研究者